最優秀賞

青森県
新郷村立野沢中学校　三年　　鹿島　愛莉

自慢の父

ホースの先から勢いよく飛び出す水。ポンプ車のエンジンがうなりを上げる。空高くまっすぐ伸びた竿の先端にぶら下がっているボール目がけて放水開始！

毎年四月になると、各地区の消防団対抗玉落とし大会が行われる。いかに早く正確に玉を落とせるか、順位を競う大会だ。父はこの練習のために仕事先から戻ってくる。

「お父さんって、今週も帰ってくるの？」

このセリフを私たち兄弟は毎日のように口にする。父は現在、六ヶ所村の建設現場で働いている。父が週に一度家に帰ってくる理由は二つある。一つは家族と過ごすため。もう一つは消防団の活動をするためだ。

消防団の活動は、火災のときだけ行うわけではない。ポンプ車の点検や災害現場に備える訓練。地域の安全を守るための見回りも欠かせない。玉落とし大会の実施も、地域の人たちの防災意識を高める大切な行事だ。だから、父は必ず帰ってくる。

「遠くで働いているんだから、そんなに毎回消防団の活動に参加しなくていいのに……。」私はそう思うこともあった。父の所属する第四分団は人数が少なく、名前を登録していても村に住んでいない人もいて、実際に集まる人はさらに減るらしい。若い人は村を出て行くケースが多いので、新人が入ってくることもめったにない。そんな状況だからこそ、父は忙しくても参加しているのだろう。

私の住む地域にはお年寄りが多く、ハザードマップでは危険度が五だ。「もし、火事や土砂崩れが起こったらどうしよう。」とニュースを見るたびに心配になる。第四分団は人数が少なすぎるので、無くそうという話が出ていたそうだが、なんとか継続できることになったと聞いて、とてもほっとした。そんな話があったからなのか、父は以前より多く帰ってきて、積極的に活動している。

普段は六ヶ所村で働いて家族を支える父。しかし、週末は消防団員として地域の人たちを支える父。私はそんな父を心から尊敬している。そして、多くの人たちに必要とされている消防団は、地域になくてはならない存在だと思う。

私には二つ上の兄がいる。兄の夢は消防士になることだ。父は二十代のころ消防士にあこがれたこともあったらしい。お酒を飲んだときだけその話をしてくれることを考えると、よほど心残りなのだろう。しかし、今、父のかなえられなかった夢は、兄が受け継ごうとしている。父の夢は、兄の夢だ。兄と私と弟。私たち兄弟三人は、父の大きな背中を見て育ってきた。だから、父のように周りの人たちに必要とされる大人になりたいと思う。

「よーい、はじめっ。」

玉落としが始まった。消防服を着た父が先頭でホースを構える。今日の父は一段とかっこいい。